

フランス革命初期における穀物の密輸出について

佐藤 真 紀

はじめに

憲法制定国民議会は1789年8月29日の法令¹⁾によって、フランス国内における穀物流通の自由を宣言した。当時の重農主義的な思想から始められたこの政策は、穀物の供給および価格の安定を生み出すはずであった。しかし実際には、各地でその価格高騰が生じることになり、このことで、都市や農村に住む大衆は不安や不満を抱えることになった²⁾。この不安や不満は、身近な「不正」に対する告発となってあらわれることが多かった。そしてこのとき大衆が、「不正」すなわち直接の攻撃対象として頻繁に言及したもののひとつに穀物の密輸出があげられる。例えば1791年12月10日立法議会において、農・商業委員会の代表として報告を行ったモネロン Mosneron は、国内各地から寄せられた苦情の主題としてまず第一に、「麦や穀粉を必要としている植民地および王国内各地にそれらを海路で搬出するという口実で行われている、外国への持ち出し」をあげている³⁾。先の8月29日の法令は穀物の輸出を当面のところ禁止していたが、にもかかわらず各地からの文書によればこれが、国内流通の自由に乗じて密に行われているというのである。

本稿では謎の多いこの密輸出について、北海沿岸の港町ダンケルク Dunkerque 市を例として扱い、ごくささやかではあるが若干の考察を試みてみたい。

1 ダンケルク市の「労働者住民」からの告発

1790年中に作成されたと考えられている「ダンケルク上区と下区に住む労働者住民たちが市長ならび助役にあてた建白書 Adresse des habitants ouvriers de la haute et basse ville de Dunkerque aux maire et officiers municipaux」では次のようなことが述べられている。

「……私たちが、1789年のときのように我慢するだろうとおそらくあなたがたは思っている。最も大切な食糧〔穀物〕がボルドー Bordeaux その他の国内地域向けという名目で輸出されそのことで、私たちが窮地に追い込まれても黙ってみているだろうと、思っている。そして現に私たちは近隣諸都市の人々とともに、そのような極限状態におかれている。私たちはあのドゥヴァンク Devinck, ショエル Schoel, ドゥー Denis [いずれも仲買商 négociant の名前] といった秩序壊乱者それに、あなたがたに商売を保護・援助してもらっているその他大勢の者たちとが使っている手練手管を知っています……」⁴⁾。

そしてこのような「不正」に対する憎悪が、実力行使となって表出することもあった。ダ

ンケルク市とその周辺地域では1790年から毎年、穀物をめぐる騒擾が発生するようになった。そしてその中で最も大規模であったのが、1792年2月13・14日のダンケルク市内での暴動である。このとき群衆は、輸送中穀物の没収や仲買商の家を略奪し、さらに港の船舶に積載されていた穀物の荷降ろしを市当局に要求してこれを実施させた⁵⁾。

他方で、暴動の鎮圧にあたった正規軍将校のジラルドン Girardon という人物は、友人にあてた手紙のなかで次のように語っている。

「5、6 か月前から麦が、ボルドーへの発送品として〔運河上を〕平底船で運ばれていた。これらの輸送船の群れのせいで神経を擦り減らした民衆は、その流れを止めにく。彼らは飢饉が仕組まれている、麦は外国に行くなどといった……」⁶⁾。

またノール県もこのダンケルクの事件を報告する際、内務大臣 ministre de l'intérieur カイエ・ドゥ・ジェルヴィル Cahier de Gerville に対し以下のように述べている。

「民衆は……港から出てゆく麦が全て、食糧不足の他県に住む同胞市民が現在直面している必要をまかなうためのものであるとは信じることができません」⁷⁾。

以上の二つの叙述から民衆が、麦の行く先は外国であると思っていたことを確認できる。従って、運河上の平底船を止めたり船舶からの荷降ろしを要求したのは、麦の国外流出を防ぐためであったのだろう。つまりこの暴動における群衆の主な目的は、穀物の密輸出を阻止することだったのである。

しかし今一度、密輸出は本当にあったのだろうかと問い直してみなければならない。というのも次のような史料をみると、民衆の確信に大きな疑問を感じざるをえないからである。

2 南部諸県からの苦情

1792年2月13・14日の最も危険な状態を脱した後もダンケルク市では不穏な状態が続いた。秩序回復は大幅に遅れ、このため当市とその周辺地域の穀物流通はその後ほとんど機能しなかった。そしてこのような状況から、穀物の到着が遅れているという苦情の声があがるようになるのであるが、それは南部諸県の商人および行政当局からのものであった。そのなかの二つを以下に紹介する。

1792年3月31日バイヨンヌ Bayonne 市当局が税務大臣 ministre des contributions publiques クラヴィエール Clavière にあてた書簡では次のようなことが述べられている。

「私たちの町は、住民の食糧として必要な穀物を用意するために他地域とやりとりをしなければなりません。この目的のために市の総評議会によって選任されたある部局が昨年9月、ダンケルクの仲買商オーギュスタン・ドゥルラン Augustin Dourlen 氏に〔重量〕1500から1600ラジエールで〔質量〕4000キンタル程の小麦の買い付けを注文しました。

1月25日、前述のドゥルラン氏によって、トマ・コリ Thomas Corrie 船長率いる船舶が

ノヌフォワ Bonne-foi 号が、その時すでに購入されていた1600キンタルの小麦を私たちの町に運ぶためチャーターされました。そして先の2月にダンケルクで起きた蜂起の際この船には、512ラジエールが積まれていました。また「運河上の」何艘かのペランドル bélandre すなわち小船にも、コリ船長の貨物として麦が積まれていました。

それらのペランドルにあった穀物は差し押さえられ、強奪されてしまいました。そしてドゥルラン氏は、どんなことをしてでも相手の信じやすさを利用して騙そうと企んでいる悪者たちによっておそらくは煽られていたのであろう民衆の激昂から逃れるために、ムナン Menin に逃亡することを余儀なくされました。

ドゥルラン氏はダンケルクの自宅に戻った後、コリ船長の積荷を補充しようとしたのですが、無駄でした。いつでも蜂起するつもりでそしてまた、ダンケルク市当局の弱さ故に何やら大胆な気持ちになっている民衆たちはドゥルラン氏に、私たちの町へ向けて始められていた発送作業を完了させませんでした。彼は同月20日付の手紙を「バイヨンヌ市当局の」部局に書き送りそのなかで、ダンケルク市当局がいくつもの船舶にすでに積まれている穀物の荷降ろしを要求しているとさえいっています。コリ船長はドゥルラン氏に対して、発送がもし遅れた場合のあらゆる出費と損害賠償について言明をしたうえで、即座に発送を行うよう何度も働きかけをしています。

私たちの町の住民は生活してゆくための穀物を必要としています。次の収穫はまだずっと後のことです。ダンケルクに要請した救援物資が頼りなのです。すでに購入された穀物と、発注分がこれから充たされるための資金とを、私たちはそこにもっているのです。あなたの愛国心と公正さと断固とした態度によって、穀物の自由な流通に関する法を実施して下さるようお願い致します。ダンケルク市当局にすぐ命令して、ドゥルランから私たちへの「穀物の」発送を保護させてください。ノール県執行部は穀物流通についての法を実施させようとしているのですが、ダンケルク市当局は全く逆の方針でいるようです。フランスの一部が無駄な豊作にある一方で、穀物不足の他地域が飢饉の惨禍にさらされるという事態はあまりにも残酷です。私たちには、この王国の他の市民すべてと同じく、法の保護を受ける権利があります。その施行により、いまダンケルクからの到着を待ちかねている穀物の発送が行われることを私たちは要求します。もしこの期待が裏切られたなら私たちは、立法議会に損害賠償を求めなければなりません、そんなことより、最も痛ましい不幸は、町の住民が生活してゆくための穀物が欠乏するということでしょう。このような状況による惨禍から町を救うために、私たちはあなたのその高名な愛国心に対し以上のようなことを訴える次第です」⁸⁾。

この文面からは、穀物を北部地域に発注したいきさつやその方法を詳細に知ることができる。そして穀物の発送を阻むダンケルク市当局への非難の言葉が述べられている。またバイヨンヌ市当局は、穀物の自由な流通に関する法の実施を要求している。この流通の自由は通説的な理解ではブルジョワジーのためのものであったとみなされるのであるが、このときばかりはバイヨンヌの貧しい住民もその実行を望んでいたのではないだろうか。しかし何よりも大切なのはこの史料が、北部地域からの麦を心待ちにしていた南部の人々の存在を知りしめていることである。従って、少なくとも仲買商ドゥルランによるバイヨンヌ市とのこの取引は、密輸出の名目として利用されたものではなかったということがわかるのである。

さらに次の史料では、密輸出に対する疑惑そのものについてふれられている。これは、モントーバン Montauban 市の仲買商 フォンタネル Fontanel が内務大臣カイエ・ドゥ・ジェルヴィルに送った覚書のなかの一節である。

「昨年南部諸県の穀物の収穫は並以下でした。北部諸県、特に旧フランドルおよびアルトワの両地方では2年続けて大変な豊作でした。前者の諸県の行政団体は、迫りつつある飢饉を防ごうと考え、次の収穫までに必要な食糧を北部から取り寄せる契約を、買占め人 *ac-capareur*—この言葉はよく使われますが意味はありません—などではなく、誠実で、その分野の仕事に通じた仲買商たちと結びました。それらの仲買商には、注文を送る者も、また自らそこ〔北部〕に赴くかあるいは代理人を派遣する者たちもいました。これらの発注は商業の常である慎重さをもって行われました。つまり、価格の著しい上昇を引き起こすことはなかったのです。これは、購入された食糧の総量が、この地方の余剰を十分に下まわっていたことを示す最も確実な証拠です。

〔しかし〕悪意あるまたは事情をよく知らぬ者たちは、ノールおよびパ・ド・カレ県の民衆に、もし穀物を流出させるままにしておいたら自分たちは窮乏し続けるだろうという危惧を抱かせるようなことをするのが好きでした。これらの諸県から南部諸県への物資の輸送は海路によってのみ可能です。民衆は惑わされ、船積みされようとしている穀物は亡命貴族軍への供給用であると信じ込むまでになってしまいました。そしておそらく思い違いをした国民議会のある議員がこのようなつくり話を演壇でしゃべり、民衆が錯乱し続けることに大いに貢献したのです。この地方の行政諸団体自身もまた錯乱して、民衆を啓蒙あるいは抑制するために何もしないばかりか、逆に反乱を許容しているかのようです。少なくとも、これ〔反乱〕を防ぐためにも、解消させるためにも何もしなかったということにより、これら諸団体は告発されえます……」⁹⁾。

フォンタネルの主張に従えば、南部地方から北部地域への穀物の買い付けは、大方の場合良心的であったが、にもかかわらず一部の商人の疑惑を招くような行為によって、民衆は穀物の行き先が亡命貴族のもとであると信じこむようになってしまったということになる。他方でフォンタネルはこのような密輸出のうわさを「つくり話」つまり、実際には全くありえないこととして扱っている。また先程のパイヨンヌ市当局の書簡と同じようにこの覚書においても、北部の地方行政は強く非難されている。

おわりに

それでは、穀物の密輸出に対する疑惑はすべて根拠のない妄想であったのであろうか。実のところ、そのように判断することも大変危険なのである。というのもダンケルクでは、穀物に限らない密輸行為全般に対してはスモグラージュ *smogglage* という独特の呼び名さえあり、いくつかの地方史研究においてこれが頻繁に行われていたことが指摘されているからである¹⁰⁾。例えばダンケルクの英雄で立法議会議員にもなったエムリ *Emmery* も、晩年の生計はとりわけ、大陸封鎖令下でのスモグラージュによってまかなっていたといわれる¹¹⁾。

国家の統制とは掛け離れたところ取引の世界が存在したというべきであろうか。

また、ダンケルク市当局が1792年3月17日に地元選出の立法議会議員たちへ書き送った書簡によれば、近隣のホーズブロック Hazebrouck ディストリクトが、ダンケルク港を出た穀物がイギリスで販売されていたという告発を行ったようである。しかしながらこれに対してはダンケルク市当局が、全面的な反論を行っている。例えば、ドゥヴァンクの荷を積んだ船は、風による損傷を補修するためにプリマス Plimouth に寄港しただけであるという。またゴダール Gaudard とカイエ Cailliez 父子（これらもダンケルクでおなじみの仲買商）の荷の場合は、これもまた突風による損傷で船が浸水し、一部の穀物が濡れてしまったため、ファルマス Falmouth において特例措置としてその販売が行われただけであると主張しているのである¹²⁾。ところが他方で、この書簡を自らが編集した史料集のなかで紹介しているジョルジュ・ルフェーヴルは、当局の弁明を言い訳としてしかみておらず、むしろ逆に「密輸は可能だった」という断定を行うための論拠としてこれを利用している¹³⁾。我々もルフェーヴルにならって民衆の味方をするべきであろうか。

以上のように穀物の密輸出の真偽については不明なことが多いが、それでもあえてここで結論を出してみるならば、密輸出はおそらく実際に行われもしたがしかし同時に、国内向けという名目の穀物取引すべてが密輸出ではなかったのだという、甚だ曖昧な主張を述べることはできない。そして唯一明らかであるのはそれが、フランス革命初期の都市や農村に住む大衆にとって、激しい憎悪の対象であったということだけなのである。

註

- 1) Duvergier, J. B., *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements, avis du Conseil d'État*, Paris, 1834, t.1, pp.38-39. Commission de recherche et de publication des documents relatifs à la vie économique de la Révolution, *Le Commerce des céréales, instruction, recueil de textes et notes*, Paris, 1907, p. 31.
- 2) 遅塚忠躬『ロベスピエールとドリヴィエールフランス革命の世界史的位置—』東京大学出版会、1986年、7-11頁。
- 3) *Archives Parlementaires de 1787 à 1860, recueil complet des débats législatifs et politiques des Chambres françaises*, première série (1787 à 1799), Paris, 1867-, t.35, p. 725.
- 4) Adresse des habitants ouvriers de la haute et basse ville de Dunkerque aux maire et officiers municipaux, Arch. dép. Nord, L 1360, Grains, approvisionnements, 1790-1793, Lefebvre, G., *Documents relatifs à l'histoire des subsistances dans le district de Bergues pendant la Révolution (1788-an V)*, 2 tomes, Lille, 1914, 1921, t.1, p. 174.
- 5) ダンケルク市とその周辺地域における食糧暴動のあらましについては、拙稿「食糧暴動にみる社会的結合関係—1792年2月13日・14日ダンケルク市の場合—」（『史学雑誌』掲載号は未定）を参照。
- 6) Lemattre, H., “Une Émeute à Dunkerque en 1792”, *Bulletin de l'Union Faulconnier*, t.4, 1901, p.377.
- 7) Lettre du département de Nord à Cahier de Gerville, ministre de l'intérieur, Douay le 15 février 1792, Arch. dép. Nord, L 1387, Subsistances, émeutes à Dunkerque, Hasnon, Haze-

- brouck, Holque, Houplines, Lille, Merville, Sin-le-Noble, Warhem, Watten (1790-an7).
- 8) Plainte de la municipalité de Bayonne à Clavière, ministre des contributions publiques, Bayonne le 31 mars 1792, Arch. dép. Nord, L 1360.このバイヨンヌ市の苦情に関しては、1792年4月27日にダンケルク市当局はノール県に対して、全ての市民は船舶への穀物の積載ができるようになったことを公示によって知らされているはずなので、到着が遅れているのであればそれはドゥラン氏のせいであると、またさらに、コリ船長はすでにバイヨンヌに着いているはずであるといっている (Lettre de la municipalité de Dunkerque au département de Nord, Dunkerque le 27 avril 1792, Arch. mun. Dunkerque D 5/2, Registre de correspondance, lettres écrites, f^o 210)。しかしバイヨンヌ市からは同年5月19日に再び苦情が出ている。他方でドゥランは5月30日にダンケルク市当局に対して、バイヨンヌ向け麦の船舶への積載を行いたいといっている (Lefebvre, *op. cit.*, t.1, p. 270)。
 - 9) Copie de la mémoire écrite par Fontanel aîné, négociant à Montauban, sans date, Arch. dép. Nord, L 1387.この史料の解説にあたっては、お茶の水女子大学の遅塚忠躬氏とダンケルク市立文書館のジャン-リュック・ポレル Jean-Luc Porhel 氏にご教示をいただいた。なお、北部地域における穀物の絶対量について、バイヨンヌ市当局とフォンタネルはともに豊富であるという認識を示しているが、北部地域の行政諸庁は、これとは全く違う見解をもっていた。ノール県は1792年6月3日付けの書簡において、カイエ・ドゥ・ジェルヴィルにかわって内務大臣となったロラン Roland に対し次のようにいっている。「昨年 [1791年] 当地方の収穫は豊作ではありませんでした。ただし、もし仮にそれらの収穫が我が県の住民のもとに保持されていたならば彼らの食糧供給には充分であったかもしれませんでした」 (Lettre du département de Nord à Roland, ministre de l'intérieur, Douay le 3 juin 1792, Arch. dép. Nord, L 1360)。また1792年3月2日の時点で、ダンケルク市当局は以下のように述べている。「・・・この [食糧] 問題に取り組んでいる、熱意と教養をもつある市民も検討の結果、[ノール] 県内にはその消費に充分な麦がないということをお私たちのある同僚に通知しています」 (Lettre de la municipalité de Dunkerque à Mazuel et Hardy, ses députés à Paris, pour insister sur la nécessité d'arrêter la circulation par mer, Dunkerque le 2 mars 1792, Arch. mun. Dunkerque, D 5/2, f^o 177)。また、ダンケルク市当局をはじめとする北部地域の行政諸庁の態度を非難する言葉がみられるという点でも、バイヨンヌ市当局とフォンタネルの文書は共通しているが、これに対してダンケルク市当局の方は、南部諸県のせいで食糧を奪われさらにそのことで1792年の大暴動にみまわれたという被害者意識を抱いている。詳しくは前掲拙稿。
 - 10) Teneur, J., "Les Commerçants dunkerquois à la fin du XVIII^e siècle et les problèmes économiques de leur temps", *Revue du Nord*, t.48, n. 188, 1966, pp. 17, 40. Pfister, Ch., "Le Commerce dunkerquois au début de la Révolution (1789-1792)", *Revue de la Société Dunkerquoise d'Histoire et d'Archéologie*, N^o23, spécial 《Révolution française》, 1989, pp. 143, 145, 151.
 - 11) Moreel, L., "Emmery, un personnage de la vie économique et de l'histoire du Nord", *Transmondia*, n.57, 1959, p. 13.
 - 12) Lettre de la municipalité de Dunkerque à Emmery et Coppens, députés à l'Assemblée nationale législative, Dunkerque, le 17 mars 1792, Arch. mun. Dunkerque, D5/2, ff^o189^v-191, Lefebvre, *op. cit.*, t.1, pp. 264-266.
 - 13) *Ibid.*, t.1, p. XXVI.